

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 10 日現在

機関番号：16401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13049

研究課題名(和文)意志・推量形式を中心とした日本語文構造の変化の研究

研究課題名(英文)The Historical Transition of the Structure of Japanese Language: Focusing on Conjecture Forms

研究代表者

北崎 勇帆 (Kitazaki, Yuho)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・准教授

研究者番号：00847949

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、意志・推量を担う形式の非終止用法(連体修飾・従属節構成の機能)の歴史的記述と、文の階層構造における位置付けの変化の解明を目指すものである。この目的に従い、主に以下の3点を解明した。

ホドニ・ガなどの従属節が推量類を包含する時期に、「否定のマイが早く、肯定のウに波及する」という時期的な差があること。現代語では容認されない従属節末における意志のウの生起(e.g. この本を貸しましょうから、読んでください)が中世・近世期には見られること。原因・理由節において、「話者の推量した事態を含まない」状態から「含み得る」状態へという、機能拡張の傾向が一般的に認められること。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「貸しましょうから、読んでみな」のような意志を表すウの包含が室町期・江戸期には盛んであったことや、ホドニなどの原因・理由節の推量を包含する機能が後発的に発展したもので、それが種々の原因・理由節の持つ一般的な傾向であることなどを示した。

特に、従来、単調減少的に考えられていた意志・推量形式の「非終止用法の衰退」という見方について、古代語と現代語の対照だけでは十分な検討が行えないことを示したことに本研究の学術的意義があり、原因・理由節が「推量を含まない状態から含み得る状態へ」という変化を起こしやすいことを示した点については、類型論的な研究に対する意義も有する。

研究成果の概要(英文)：This study aims to describe the historical description of will and inference forms in Japanese and to understand the changes in their positioning in the hierarchical structure of sentences. Following this goal, we clarified three main points.

I. There is a difference in the timing of when subordinate clauses such as 'hodoni' and 'ga' contain inferences, "negative '-mai' is earlier and positive '-oo' is later". II. In Late Middle and Early Modern Japanese, there are examples in which '-oo' at the end of subordinate clauses appears to express the speaker's will. III. In causal clauses, there is a general tendency for functional expansion from a state that "does not include inference by the speaker" to a state that "can include the situation inferred by the speaker".

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 文法史 モダリティ 条件表現 文体史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

話し手の意志・推量を表す際に用いられる「(よ)う」は、連体修飾の用法は極めて限定的であり、従属節内での生起の自由度も低い。しかしながら、歴史を細かく見ていくと、「(よ)う」がその後接要素を広げる、すなわち、「非終止用法」を新たに獲得している事例が複数ある。これは、単調減少的な「非終止用法の衰退・固定化」という従来の観点では「(よ)う」の歴史を捉えきれず、なお検討の余地があることを示している。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では、意志・推量形式を中心とした、文の階層構造の通時的变化の解明を中心の目的とする。

3. 研究の方法

各時代において、個別の従属節(や、連体修飾などの非終止用法)がどういった形式に接続するか/しないかを調査することで、意志・推量形式側と、従属節側の両側面から分析を行う。併せて、典型的な口語資料以外での当該現象の様相や、当該現象をよりよく理解するための言語資料についても検討する。

4. 研究成果

ホドニ・ガなどの従属節について、これらの節が推量類を包含する時期に、否定のマイが早く、肯定のウに波及するという時期的な差があることを明らかにし、この差が、マイがベシ・マジ系の機能を引き継ぐことに起因するものと論じた。('意志・推量形式の従属節への取り込み')『中部日本・日本語学研究論集』和泉書院、2022年1月)

現代語では容認されない従属節末における意志のウ類の生起(e.g. この本を貸しましょうから、読んでください)が中世・近世期には見られることを指摘し、その史的変遷について論じた。('中世・近世における従属節末の意志形式の生起')『日本語の研究』17(2)、2021年8月)

近世期における従属節内の助動詞の生起の可否を、コーパスを用いて網羅的に整理し、隣接する時代との差異(例えば、現代語で「だろうから」が可能なカラ節は、定着期の近世前期にはウ類を包含しない)を分析した。('近世における従属句の階層性')「通時コーパス」シンポジウム2020オンライン/The Layered Structure of Subordinate Clauses in Early Modern Japanese, EAJS2021, 2021年8月25日)

現代共通語の原因・理由節においては、機能が広く「明日は雨が降るだろうから」のように推量類を包含可能なカラと、それが許容しにくい機能の「狭い」ノデがある。他方で、カラも時代を遡るとダロウを包含し得なかった時期があり、他の形式においてもこうした機能拡張の傾向が認められる。この拡張を一般的な傾向と見た上で、そうした傾向の存する理由についての分析をおこなった。('原因・理由と話者の判断')筑紫日本語研究会第288回研究会、2021年12月27日→「原因・理由と話者の判断」『日本語文法史研究6』ひつじ書房、2022年11月)

古代語の希望表現について、形容詞系の願望の形式(ほし、~まほし、~たし)が、古代語では「ケーキを食べたい」のように文末に生起することは稀であり、終助詞系の形式(~てしか、~ばや)と住み分けられていたこと、それが形容詞系に統合される形で変化したことを論じた。('欲しい')『日本語学』39(2)、2020年6月/「希望表現の史的変遷—願望を中心に—」『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房、2022年10月)

「なぜかといえば」のように、話者が疑問文の不定項を自ら説明する表現がある。こうした「不定語疑問文の主題化」について、元来の和文がこうした方法を持たず、漢文訓読によって日本語に生まれた表現であることや、その歴史について明らかにした。('不定語疑問文の主題化')「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究」2022年度第1回研究発表会 2022年12月3日)

上記の「なぜかといえば」のような表現は、所謂「口語資料」には見出されるものの、典型的な対話には用いられにくい。従属節の分裂文である「~のは~からだ」もそうした表現の一つであり、古代語の「~ばなり」の使用状況の報告と併せて、こうした「理屈っぽい」表現の成立・定着の過程について、考察を行った。('条件表現史上の「理屈っぽい」表現')第10回川島拓馬を囲む会(富山日本語史研究会) 2022年12月29日)

ロドリゲス『日本大文典』の従属節末における意志・推量形式の記述において「話しことば」と「書きことば」とがうまく対応しないことを示した上で、それがロドリゲス自身の言語意識を反映するものであることを指摘した。（『日本大文典』の意志・推量形式と「話しことば」「書きことば」『高知大國文』51、2020年12月）

近世の戯作『春色梅児誉美』を近代に口語訳した「新訳」作品を新資料として紹介し、原作のウをダロウに、ナゼ～ダロウをナゼ～ノダロウに、従属節内で意志を表すウを基本形に、といった改変事例を挙げ、当代話者にとって原作の当該表現が古い表現であったことを示した。（「近代に口語訳された三種の梅暦」『近代語研究 22』武蔵野書院、2021年3月）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 北崎 勇帆	4. 巻 -
2. 論文標題 原因・理由と話者の判断	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法史研究6	6. 最初と最後の頁 133-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 北崎 勇帆	4. 巻 -
2. 論文標題 希望表現の史的変遷 願望を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コーパスによる日本語史研究 中古・中世編	6. 最初と最後の頁 109-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 北崎 勇帆	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 中世・近世における従属節末の意志形式の生起	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.17.2_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 北崎 勇帆	4. 巻 -
2. 論文標題 意志・推量形式の従属節への取り込み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部日本・日本語学研究論集	6. 最初と最後の頁 117-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北崎勇帆	4. 巻 51
2. 論文標題 『日本大文典』の意志・推量形式と「話しことば」「書きことば」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知大國文	6. 最初と最後の頁 79(1)-63(17)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北崎勇帆	4. 巻 22
2. 論文標題 近代に口語訳された三種の梅暦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 335-356
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北崎勇帆	4. 巻 39(2)
2. 論文標題 欲しい(特集 コーパスによる語史と現代語誌)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 北崎 勇帆
2. 発表標題 原因・理由と話者の判断
3. 学会等名 筑紫日本語研究会 第288回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kitazaki Yuho
2. 発表標題 The Layered Structure of Subordinate Clauses in Early Modern Japanese
3. 学会等名 EAJS2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北崎勇帆
2. 発表標題 近世における従属句の階層性
3. 学会等名 「通時コーパス」シンポジウム2020オンライン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北崎勇帆
2. 発表標題 中世・近世における従属節末の意志形式の生起
3. 学会等名 近代語学会2020年度研究発表会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------